



日本新記録の表彰状とともに撮影

年齢区別で行う競泳のジャパンマ
スターズにおいて、今年の7月19日
に行われた男子95歳区分50m自由形
で、芝地区在住の田村秀一さん(94)
はダイナミックなフォームで50mを一気
に泳ぎきり、48秒66の日本新記録を
樹立、優勝した。

94歳の高齢でありながら、素晴らしい記録を打ち立てられた田村さんにお話を聞いた。

田村さんは4人兄弟の3番目として、大正9年(1920)アメリカ開拓移民だった両親のもとロサンゼルスで生まれました。その後、生後4カ月で帰国し、少年時代を和歌山で過ごす。日課は、家のすぐ脇にあった紀の川で友だちと一緒にポンポン船を追いかけて泳ぐこと。川で遊ぶ日々の中では、船のロープに足がからまり九死に一生を得た経験も。

紀の川で泳ぎを覚えた金メダリストには、他にも前畑秀子選手、古川勝選手がいるそうで、田村さんにとっても紀の川が水泳のルーツになっているのだろう。

その頃、兄の影響で小学校の水泳クラブにも所属していた田村さんだが、青年期には水泳を離れ、激動の人生が始まる。

渡米そして帰国、定年まで

昭和13年(1938)、田村さんは17歳で単身渡米を果たし、自活してサンタマリア・ジュニアカレッジに入学。航空工学を専攻し卒業した。ジュニアカレッジ時代に入部したアメリカンフットボール部では、「全米一の軽量プレイヤー」として大活躍し、シーズン半ばにはその活躍から名誉のジャケットと表彰状を学長から手渡されたこともあったそ

うだ。その後、戦争は激化し、田村さんは収容所での生活を余儀なくされた。

昭和21年(1946)、田村さんは25歳で帰国し、伊藤忠商事に就職。航空機に関する要職を歴任した。

定年まで航空機一筋の仕事を勤めあげ、ようやく時間に余裕もできたところで自分の健康のためにと、今からちょうど20年前に自分に合うスポーツジムを見つけ、プールに通いだした。

世界新記録達成に向けて

田村さんが水泳を再開した理由の一つに、兄の存在がある。小学校から水泳を行ってきた兄の勇さんは、水泳のスポーツ推薦で慶應義塾大学に入り、実力をつけた。もう少しでオリンピックに出場できるほどで、そのことから田村さんは水泳を身近に感じていたそう

ずっと水泳を続けていた兄は、「弟と自分がいれば世界記録を作れる!」と、水泳を再開していた田村さんをフリーリレー種目に誘った。当時のフリーリレーの世界記録は、アメリカ人が樹立

した3分46秒台。そして迎えた「FIAマ
スターズスイミング選手権大会2008」
の男子200mフリーリレー年齢区分
360歳～399歳(合計年齢)。田村兄弟
は、タイム3分08秒87で大幅に世界記
録を更新した。現在もそのタイムは破
られていない。

この大会がきっかけとなり、田村さんは水泳における記録挑戦への思いを強くした。

今年の日本記録樹立にも田村さんは、「幼少の頃の紀の川での泳ぎを思いだし、たとえ我流であっても、このタイムなら95歳区分の日本新記録を達成できるに違いないという自信があった。試行錯誤で泳ぎ方を変え、年齢を重ねる度に段々と速くなってきている。昨年より3秒近く速く泳げるようになっていし、今の目標は、タイムを1秒縮めて世界新記録を達成すること」と力強く語ってくれた。

これからの田村さんの泳ぎに注目していきたい。

[文 ■ 田岡恵美]

取材 ■ 田岡恵美、中川寛之]



平成20年(2008)の
男子200mリレーでの写真。
青いキャップが兄の勇さん。
田村さんは左から2番目



男子200mフリーリレーでの
世界記録突破証(左)と
日本新記録樹立の表彰状(右)



メダルや表彰状は田村さんの宝物

「いまでもモテる」とお茶目な田村さん、元気の秘密は？

田村秀一さんは身長171cm、体重66kg。腰が曲がることなくずっと立っておられると、実際より大柄に見える。その姿勢はまさに田村さんがアスリートであることを証明していた。そんな田村さんに健康の秘訣を伺った。

運動

運動 週5日、五反田のスポーツクラブのプールに通う。20年間続けているという。まずプールマッサージで足や腰をほぐした後、300m、150mと泳ぎ、サウナで汗を流す。決まったメニューで1時間、しっかりと体を動かす。自宅とプールの往復で5000歩ほど歩き、スクワットも毎日10回欠かさない。ジムで腰を痛めた経験から「自信過剰、やり過ぎは禁物」。

食 事

食事 毎日3食、きっちり食べる。朝夕は自分で調理する。ビーフカレーや具材をたくさん入れたハンバーグ、玉子焼きなどが定番で、3回に1回は魚をいただく。粉末のクエン酸を

流儀

1日ティースプーン1杯飲み、ごま油、青汁なども長く愛飲している。

流儀 運動でも食事でも規則正しく、長く続けるのが田村流。6時に起きて10時半に寝る。「何でも習慣にしていればいいんです」と話す。「ぼくは神経は遣わない。なるようになるという考え方」とも。日米激動の時代を生き抜き、一命を落としそうな経験も経て、自分は「奇跡で生きてきた男」「我が人生にツキあり」と言い切る。「いまでも少しモテルんですよ」とお茶目なところも、元気でいられる秘訣かもしれない。

[文 ■ 中川寛之]



祖父の面影を受け継ぐ『お可免鮓』五代目 長谷文彦さん

歴史が刻まれる名店

田町駅から徒歩8分ほど。芝四丁目交差点近くにある「お可免鮓」は、安政2年(1855)創業の160年続く江戸前鮓の老舗です。

この辺りは落語「芝浜」の舞台。かつては江戸湾に面した漁場でした。新橋―横浜間の鉄道を敷設する際、海岸線に堤防を築いて、その上を線路が走るようになります。国鉄(現在のJ R)が雑魚場架道橋と呼んだ周辺の海面は明治から昭和にかけて埋め立てられ、陸地となりました(現在の芝浦地区)。今は区立本芝公園内に雑魚場(魚市場)旧跡を示す碑があるのみですが、徳川家康入府の際、干潮時に船が座礁し立ち往生していた家康を漁師が助けたことから、芝浜の魚河岸は江戸城に御采(おかず)の高級魚を上納する漁場として免状をもらったお墨付きの市場でした。これが「おかめ鮓」の店名「御可免」の由来です。



受け継がれる粋な江戸っ子気質

5代目の文彦さんが3代目の祖父文三郎との思い出を綴ったパンフレットがあります。初代は高輪にあったイギリス公使館に魚を売りに通っており、そこで飯炊きの手伝いをしていた女性と結ばれ、寺や華族屋敷に納める仕出しの鮓屋を始めます。正座をして握った鮓を、華族の家紋が入った鮓桶のような白木の飯



台に入れている写真は、今の鮓屋とは違って驚きでした。

3代目の強い勧めで鮓屋を継いだ文彦さんは、幼い頃から祖父に似ていると言われました。爽やかな白衣で、軽快な江戸言葉。「粋なおじいちゃんで、鮓屋に誇りを持っていました。握る鮓はとても大きく、今の3倍はありました。芸事も好きでした。近所に料亭や置屋、検査のある花街があり、そこで小唄や清元を習っていました。顔が広く社交的。店のご鼠員は会社の社長や花柳界・梨園の人から、近所の人までさまざまで、仕事帰りに銭湯へ寄り、その足で軽く鮓をつまんでいく職人もいました。高級志向ではなく庶民感覚を忘れない祖父に、顔見知りのお客さまが絶えませんでした。

戦争で焼け野原になった時は、バラックで商売を続けていました。魚もなかなか手に入らず、築地だけでなく鶴見まで仕入れに行きました。高度成長期やバブルといった時代の変貌とともに、この一帯は漁業のまちから工業のまちへと変わり、花街もマンションに。古くからの住人も少なくなりました。祖父はそれでも土地を売らずに商売を続けました。

4代目の父は3代目の祖父とは違い、黙々と鮓を握る職人氣質。5代目のわたしはやはり祖父に似ているようです」と家族との思い出を語ってくださいました。

お可免鮓の江戸前鮓いまむか!

3代目の江戸前鮓は、鮓、平目、芝海老、赤貝、穴子、白魚など、芝浜から手こぎの船で漁に出て捕

れるネタを6貫と、芝浦で養殖された海苔で巻いた海苔巻き1本。海苔巻きは4等分に切っていたそうです。現在はさまざまな種類のネタを楽しみたいというニーズや、食べやすさを考慮し、握りを小さく、数を増やし、海苔巻きも1本を6等分にしています。

「客良し、売り手良し、世間良し」の三方良し

4代目は若手への門戸を開き、多くの弟子を育てました。赤坂にある一番弟子の店を訪ねたとき、その握り鮓に親父の味を感じたという文彦さん。塩使いや醤油、酢使い、煮方など、初代からの味を引き継ぎできました。

昨今は外国からのお客さまも多く、ワインと鮓を楽しむスタイルもあるそうです。

地方に向ければ食材巡り。伝統を維持しつつ目指すのは、お客さまに喜んでもらい、世界に向かっておいしい鮓を提供すること。まちとともに商売を続けていきたいという、三方良しを目指す文彦さんは、世界に目を向ける鮓職人です。粋な祖父の心意気を受け継ぎ、面影が残る江戸っ子の5代目に、歴史と輝く未来を感じました。



【文 ■ 早川由紀 取材 ■ 森明、早川由紀】

- 取材協力：お可免鮓 長谷文彦さん
- 参考資料：「5×3芝浦おかめ物語 五代目が語る三代目文三郎との思い出」長谷文彦
- 参考文献：「東京都港区近代沿革図集 芝・三田・芝浦」東京都港区立三田図書館 「江戸前の海民 一芝・金杉浦の記憶―」木下達文 著 港区教育委員会

Information

お可免鮓
芝4-9-4
TEL 03-3451-6430

芝の 食文化 名酒

長い伝統と技術が醸す 蔵元の秀作

二千年もの昔から造られていたという日本酒は、神事や行事、日々の生活に欠かせない日本独自のお酒です。造り方や味は長い歴史の過程で進化し続けてきました。

今の日本酒の原型は江戸時代にあります。日本各地に造り酒屋ができて、杜氏制度が確立されたのもこの頃です。現在では約1300社ほどの蔵元があり、その多くは地元限定で出荷しています。

各蔵元ではこだわりを持った伝統と技で、生酛造りや山廃仕込みなど、造り手の顔が見えるお酒造りを続けています。ユネスコ無形文化遺産となった和食とともに、日本酒も海外で人気が高まっており、世界に向けて販売している蔵元が増えているそうです。

瓶のラベルに表示してあるお酒の名称、純米酒、本醸造酒、吟醸酒などの種類や原料米、使用酵母などは、いわばプロフィール。内容を知って飲むと、一段と味わいが深まりま



お客さんの要望に応え説明する武倉吾郎店長



人気の高い試飲3点セット(左)「雪子町 大吟醸 五十一号 袋吊り」(渡辺酒造本店)。ふくよかなコクのある味わい。(中)「鳳陽華宴」(内ヶ崎酒造店)。すっきりとした上品な口当たり。(右)「萬穂 三日罎」(中谷酒造)。純米酒ならではのまろやかな旨み

す。また、食べ物に旬があるように、日本酒にも春は新酒、夏には生酒、秋はひやおろし、そして冬はしぼりたてと、季節ごとの味を楽しむことができます。

全国の蔵元と地酒を紹介する月刊情報紙「B I M Y」を発行している武者英三編集長は「世の中にあまり知られず、地元だけで飲まれている名酒がたくさんあるので、ぜひ東京の人たちに紹介したい」との切なる思いから、懇意にしている蔵元約40社の協力を得て、平成4年(1992)7月、蔵元アンテナショップ「名酒センター」をオープンしました。コーヒーチェーン店のように気軽に、カジュアルに飲んでほしいからと、立ち飲みスタイルにしたそうです。

名酒センター専務取締役の竹林ゆうさんは「日本にはその土地だけに出自しているお酒が多く、また、それぞれの味に蔵

元さんの人柄が出ていますから、ぜひ知らないお酒を味わって楽しんでいただきたいです」と、蔵元の顔を思い浮かべるように話していました。

「二十歳のとき、居酒屋で初めて日本酒を飲んだのですが、美味しくなくてショックを受けました」と話すのは店長の武倉吾郎さん。それから日本酒について勉強を始め、日本の文化として世界に誇れる特殊な技術を持っていて、美味しいお酒がたくさんあることを知ったと言います。「日本人として、日本酒をより多くの人に知ってほしいですね」と、日本酒文化に奥深い魅力があることを教えてくれました。

店では、毎月行われる「武者英三の日本酒塾」や蔵元を囲む会のほか、不定期の蔵元見学会などのイベントが行われ、毎回、日本酒ファンでにぎわっています。

「酒は百薬の長」と言われるだけに、循環器機能を高め、血行を促進し、生活習慣病や老化防止のほか、たくさんの効果があります。ただし適量を飲むに限りです。



常時100種は揃えてあるという名酒が並んだ店内。外国人のお客さんも増えている

【文 ■ 千葉みな子 写真 ■ 米原剛】

- 参考文献
「世界に誇る!国酒!日本酒」友田晶子 著 ギャップ・ジャパン編集部
「お酒の科学」佐藤成美 著 日刊工業新聞社

Information

名酒センター
浜松町2-3-29 磯山第2ビル1階
TEL 03-5405-4441

芝地区 いきいき プラザ プラザ神明フェスティバル

プラザ神明フェスティバルは、9月と12月の年2回開催されています。全く趣向の異なる2つのフェスティバル。今回は、9月5日に行われたフェスティバルをご紹介します。

今回のフェスティバルのサブタイトルは、「この夏体験したい30のコト」。国際交流、企業交流、



芸術とその他の交流として、約30のブースを設置。また、港区にあるたくさん的大使館や企業について、もっと詳しく知ってもらうためのイベントが企画されていました。どのブースもスタッフが一つ

つ、大使館や国際交流団体、企業、大学など直接連絡を取り、交渉して参加が決定したとのこと。私も会場へ出かけましたが、普段体験できないようなコーナーが目白押しでした。

エチオピアン・ダンスワークショップ

エチオピアからやってきた、世界一肩こりに効く



4F 国際交流ブース



5F 大学生のお話会

というダンス。リズムに合わせ、肩を揺らして踊ります。大人から子どもまで大満足の内容でした。エチオピアのほかにも、国際交流ブースにはガーナ、ウズベキスタン、カザフスタン、モルディブなどが参加し、交流を楽しみました。

ラーメンづくり

誰もが知っているラーメン屋さんのワークショップ。麺づくりや餃子を包む作業と一緒に、最後にいただきました。これまでは見るだけだった作る工程を体験し、とてもおいしく楽しい時間を過ごせました。



5F 地域コミュニティ部会 芝・輪投げ

間伐材で「マイはし」づくり

港区が間伐材に関する協定を結んでいる自治体、群馬県沼田市によるコーナー。間伐材を有効活用し、世界に一つしかない自分のはしを作ろうという企画です。参加者は、自分の手に合わせてわ



6F 「マイはし」づくり



6F バランスボールで遊ぼう

くわくしながら木を削っていました。

＊ ＊ ＊

フェスティバルには、子どもだけでなく、大人も夢中になってしまうブースなど、魅力にあふれたコーナーがたくさんありました。

プラザ神明のスタッフに、実施する上でのポイントを聞いてみると「ただ依頼して終わりではなく、子どもからお年寄りまでさまざまな世代にご参加いただく中で、誰もが楽しめる企画になるよう、ブースを出してくれた各協力機関と内容について一緒に考えています」とのこと。時には無理なお願いをしてしまい、出展者を困らせてしまうこともあったそうです。スタッフたちの情熱が、魅力あるフェスティバルを生み出していることを発見できました。

次にフェスティバルが開催されるのは12月。どんなイベントになるのか楽しみです。

皆さんぜひ、気軽に遊びに行きましょう。

【文・写真 ■ 米原剛】

- 写真・資料提供
指定管理者：百葉の会・東急コミュニティ共同事業体

Information

三田いきいきプラザ
芝4-1-17 TEL 03-3452-9421

神明いきいきプラザ(プラザ神明)
浜松町1-6-7 TEL 03-3436-2500

虎ノ門いきいきプラザ(とらトピア)
虎ノ門1-21-10 TEL 03-3539-2941

●ホームページ [http:// www.toratopia.com/](http://www.toratopia.com/)



今回のプラザ神明フェスティバル
「めえ〜り〜クリスマス」
日時：12月12日(土) 午前11時から午後5時

芝消防署完成！

10月28日より事務開始。

新庁舎で指揮を執る永井署長のお話と

これまでの芝消防署の歩みをあわせてご紹介します。



建物概要
鉄筋コンクリート造り 地下2階から地上9階 建築面積1264㎡

新庁舎の主な特徴

- 屋上** 屋上緑化、太陽光パネルを採用。環境に配慮した建物となっています
- 5～8階** 震災など非常時に備えた職員待機宿舎を設置
- 4階** 会議室
- 3階** 救命講習や防火・防災行事などで地域の皆さんが利用できる体育訓練室と、職員待機室を設置
- 2階** 各種申請の受付を行う総務課、警防課、予防課の事務室や消防相談を行う都民相談室のほか、消防関係の展示コーナーを設置
- 1階** 来署者の受付は1階で。ポンプ車・はしご車・救急車などの消防車両を備えた車庫があります
- 地下2階** 地下2階から2階の吹き抜け空間に屋内訓練場を設置。ガラス戸越しに外からも訓練の様子を見学できます



永井秀明署長に聞く 新庁舎完成のよろこびとともに

新庁舎は地域住民との交流の場に

大地震があっても任務遂行に支障がないよう、中間震震構造に加え、太陽光と地熱発電設備を備えた新庁舎は、汐留イタリア街に誕生しました。このエリアとの調和を図った建物は、2階部分まで東側に7本、北側には11本の円柱が立っており、内側はイタリアのボローニャ地方で有名なポルティコ(回廊)になっていて、一般の方々も通行できます。また、1階庁舎内の訓練スペースはガラス越しになっており、特別救助隊が汗を流す姿を見ることができます。子どもたちが職員の訓練を見学に来たり、地元の人が職員と話したりできる交流の場になっていくとうれしいですね。

まちを守るにはまちを愛することが必要

我々は、「都民の生命身体財産を災害から守る」という究極の使命があります。自分にとって大切な物や人は、任務でなくても心から守ろうと思います。ならば、我々のテリトリーである管内をつぶさに知って、心から愛する気持ちを持つ

ことが防火防災の第一歩だと思っています。地元の人が誇りに思っている名所旧跡を訪ねたり、地元の人が愛している名物、名産などを味わって、地元の人達とともに地元を愛することこそが、地元をよく知ることにになり、いざという時に、迅速的確にきめ細やかな対応ができると確信しています。

私は、まちを深く知ることがまちを守ることへつながっていくと考えています。自分の住むまちの素晴らしさを知り、親しみを持つようになることが、まちを守りたい気持ちへ変化していくと思うからです。その防災の第一歩となる思いを、未来を担う子どもたちへ伝えていくことも、我々の大切な役割です。

また、芝地区は国際色豊かなまちでもあります。国境を越えて救助の手をさしのべられるよう、救急隊1チームに1人英語が話せる隊員がいます。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、「区民が安全で安心して暮らせる街・芝」をめざして今後も努力してまいりますので、ご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

【文 ■ 中島洋 取材 ■ 米原剛、中島洋】

HISTORY 1

生命を守る消防

ここに1冊の本、『芝消防百年の歩み』があります。芝消防の100年をつづった貴重な本です。奥付を見ますと、編集「東京消防庁芝消防署」・発行「芝消防署開署100年記念事業実行委員会」・刊行「昭和56年6月1日」と記載されています。

この本では、芝消防署の100年にわたる献身的な活動の一端を知ることができました。目を引いたのは、「芝消防署開署100年記念歌」です。昭和7年(1932)10月1日に芝消防署に配属された平松重男氏が作词・作曲し、楽譜も掲載されています。「生ぶ声挙げて ここに100年(以下省略)」で始まる力強い歌です。

芝消防署の周辺

江戸時代から栄えた芝地域。徳川家の菩提寺である「増上寺」や庶民が崇敬してきた「芝神明様」(現在の芝大神宮)があり、また、神明通りには、かつて絵草紙屋などが軒を連ねていました。絵草紙は、参勤交代で江戸にきた武士が江戸土産として買い求めたそうです。

芝周辺の子どもたちには、「ええ」と言うと、間髪いれずに「絵は神明前よ」という合言葉があったといいます。遊びが終わって別れるときには、「あばよ、芝よ」とも言ったそうです(30年ほど前に、古くからこの辺りに住む方に聞いた話です)。また、神田で纏持ちになれば一人前以上の出世ができたことから、「芝で生まれて神田に育ち、今じや立派な纏もち」と言われていました。

消防も江戸から明治へ

「大名火消」、明暦の大火後に4人の旗本が作った「定火消」、「いろは48組」で知られる「町火消」。江戸時代に組織化されたこの3つの火消のうち、町火消を除いた2つが明治維新後に廃止され、明治5年(1872)、町火消は「消防組」と改称されました。明治14年(1881)6月1日には、「消防第2分署」が創設。今日の芝消防署が産声をあげます。英国製蒸気ポンプや駆走馬車など近代的な消火設備を用いて、消火活動を行うようになりました。

安全なまちの推進

芝における消防活動も100年を超え、人々の生命を守るという崇高な理念のもとに、これからも安心して暮らせるまちづくりの推進に尽力して欲しいと願っています。

【文 ■ 清田和美】



各組が集まての梯子乗りの披露

●参考文献
「日本火災学会誌」1988年5月
「東京消防庁50年の歩み」
東京消防庁総務部総務課
「芝消防百年の歩み」
芝消防署開署100年記念事業実行委員会
昭和56年6月1日 刊

「東京の消防百年の歩み」
東京消防庁 昭和55年6月1日 刊
「芝区誌」
東京市芝区役所 昭和13年3月31日 刊
「芝を語る」
編者 藤田和彦
発行 芝を語る会出版会
昭和36年6月2日 刊

永井署長オススメ

年々、救急出場件数が増加して救急車の現場到着時間が延長しつつあります。救急要請の中には結果的に不急のものもあるので、119番するかどうか迷ったら、救急相談センターや救急受診ガイドの活用をおすすめします。

「今すぐ病院に行った方がいいのか?」「救急車呼んだ方がいいのか?」と迷った時大変有効です。東京消防庁救急相談センター発行の『救急受診ガイド』はA4判50ページの冊子で、QRコードから内容をダウンロードすることも可能です。このガイドでは症状別

にすぐに救急車を呼んだ方がいいのかなど緊急度を知ることができます。また電話#7119で24時間年中無休の救急相談センターにつながり、医師や看護師が適切なアドバイスをします。症状によっては直ちに救急車を出動させます。

【文 ■ 中島洋】

HISTORY 2

近代から現代へ

明治時代から最先端の消防技術でまちの安全を守り続けている芝消防の歩みをご紹介します。

芝消防署の始まりは消防第2分署

明治14年(1881)6月1日
現在の芝消防署の前身となる警視庁消防本署消防第2分署を芝区宮本町29番巡査分遣所に設置

宮本町から愛宕町(前庁舎跡)に移転

明治17年(1884)1月8日
平成27年10月の新庁舎完成までの長い間、芝消防署の本拠地となる愛宕町3-6に移転

御田出張所・将監橋出張所を新設

大正8年(1919)8月30日
芝地区初の御田出張所。現在地の三田2-21に設置
大正13年(1924)3月29日
続いて片門前町三丁目に将監橋出張所を設置

本署庁舎完成

大正15年(1916)2月21日
鉄筋コンクリート造り2階建ての本署庁舎が完成。7月には芝消防署と改称

芝浦出張所・巴町派出所を新設

昭和2年(1927)12月1日
南浜18番地に芝浦出張所を設置
昭和17年(1942)12月1日
西久保巴町31番地に巴町派出所を設置

芝消防団を発足

昭和22年(1947)12月
地域住民で構成される芝地区初の消防団が発足

御田出張所庁舎が完成

昭和26年(1951)4月25日
御田出張所の庁舎が完成。昭和45年6月には御田出張所から三田出張所に改称

前芝消防署庁舎完成

昭和48年(1973)3月10日
今年10月まで42年間、芝地区を守り続けた耐火造り地上11階地下1階建ての本署庁舎が完成

将監橋出生所閉鎖・巴町派出所は事務閉鎖

昭和54年(1979)4月1日
消防力の再配備計画につき巴町派出所は事務閉鎖、将監橋出張所は閉鎖に



将監橋出張所(現在廃止)
昭和56年頃



巴町出張所(現在廃止)
昭和35年頃

三田・芝浦出張所庁舎完成

昭和56年(1981)10月15日
耐火造り地上2階地下1階建ての現在の三田出張所が完成
昭和57年(1982)9月22日
耐火造り地上3階建ての現在の芝浦出張所が完成

本署庁舎(前庁舎)の増築・改築

平成5年(1993)11月24日
本署庁舎の増築・改築工事で別棟を設置

新庁舎へ移転

平成27年(2015)10月28日
芝消防署前庁舎が134年の歴史に幕を閉じ、東新橋2-13-7へ移転



●大正8年開所の御田出張所
昭和20年8月頃



●大正15年落成直後の本署庁舎



●昭和2年開所の芝浦出張所
昭和30年代後半



●昭和26年完成の御田出張所
庁舎 昭和30年代後半



●改築前の本署庁舎 昭和46年頃



●昭和48年完成の本署庁舎



●昭和56年完成の三田出張所



●昭和57年完成の芝浦出張所



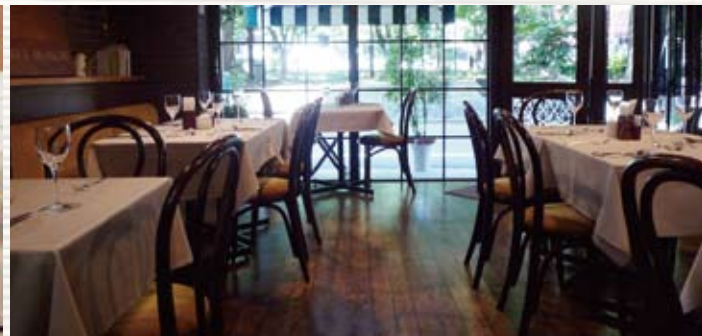
●写真提供 東京消防庁芝消防署

左から奥様 幸子さん、三上昇シェフ、次女 千春さん、長女 まつえさん



緑と白のテントが目印

Joque Blanche トックブランシュ — 芝公園の隠れ家ビストロ —



レンガがポイントの落ち着いた店内

人気メニューのハンバーグはデミグラスソースがたっぷりでジューシー！



デザートまで手を抜かない美味しさ



エントランス

コックマンの帽子に憧れて…

芝公園に「トックブランシュ」というレストランがある。

増上寺の参道からほど近い、ストライプのテントが目印のこのお店は、周辺では古参のフレンチ・ビストロだ。落ち着いたインテリア、窓の外では緑がそよぎ、店内の雰囲気は表通りの喧騒とは別世界のようなのだ。

「お店を開く時、閑静なこの場所がとても気に入りました」と話すオーナーシェフの三上昇さんは、新堀町出身の生粋の芝人だ。「小学校5年生のとき母が他界し、兄や姉と家事をするなか、わたしは料理が担当で、それがこの道に入るきっかけとなりました。初めは西荻窪の洋食店『こけし屋』、そして当時麹町にあったビストロの名店『夏目亭』で修業し、昭和57年(1982)1月にこの店を開きました。トックブランシュとはフランス語で「コックさんの帽子」のこと。子どもの頃からあの背の高い帽子が憧れだったので店名にしたんです。今年で33年！料理バカだから続けてこられたのかな？(笑)」



手間を惜しまず素材の味を活かす

「化学調味料は一切使いません。吟味した材料を手間ひまかけて料理し、素材の味を引き出します。メインのソースであるデミグラスソースは1週間かけて作り、人気のハンバーグなどに使っています。本来は濃厚なソースですが、うちでは小麦粉を使わないので、軽い口当たりで胃の負担になりません。オーソドックスな料理でも工夫を重ね、常にオリジナリティを大切にしています。わたしはメインの料理をドーンと盛るのが好きなんです！看板はフレンチレストランですが、フランス料理の基本を大切に、トックブランシュ・オリジナルをお出ししていきたいですね。一見クールな印象の三上シェフだが、料理の話をする時の表情は少年のようだ。

この辺りはお店が少なく静かだ。「隠れ家的なところが、うちの魅力だと思っています。テーブルクロスが掛かっているせいか敷居が高いと思われがちですが、一度お店に入るとリピーターになってくれる方が多く、これまでもお客さまがたくさんのお客さまを紹介してくれました」。お店のファンには、場所柄お寺に關係する方や外国の方も多いらしい。

芝公園で過ごすクリスマス♪

職人気質のシェフを、奥さまの幸子さん、長女のまつえさん、次女の千春さんが支え、気持ちのよいサービスで迎えてくれる。家族で営むこのお店は、ディナーは3,900円からと値段もお手頃だ。

12月、親しい人と美味しい料理をゆっくり楽しみたい季節だ。そんな時に、トックブランシュはぴったりのビストロといえる。「クリスマスにはスペシャルメニューをご用意しています。また、パーティーのご予約も承っておりますので、ぜひこの機会にいらしてください！」と三上シェフ。スープからデザートまで、丁寧に作られた味わい深い料理の数々と、ぬくもりあふれるサービスが、あなたを迎えてくれることだろう。

【取材・文・写真 ■ 森田友子】

●取材協力・写真提供 トックブランシュ

Information

トックブランシュ
芝公園2-2-21 SHIBA PARK BLD 1階
TEL03-3431-7696
●ホームページ <http://toque-b.com/>

旧町名由来板をご存じですか？

大正10年(1921)発行の「東京市芝区図」(東京通信局発行)を参照すると、芝地区には、当時74の町名がありました。その後、住居表示実施などによる町名変更があり、現在使われている町名になりました。74の旧町名のうち、現在71の町名の由来を記した旧町名由来板を芝区内19か所に設置しています。今回は「芝新堀町児童遊園」(芝地区MAP16)に設置されている旧町名由来板から、2つの旧町名を紹介します。



今回紹介した旧町名由来板が設置されている区立芝新堀町児童遊園(芝2-12-3)

しんぼりちょう

新堀町

町名は延宝3年(1675)、古川下流を掘り抜けて以来、このあたりを新堀川と称していたことに由来します。北は新堀河岸に沿い、金杉、西應寺、三田四国町、松本町に囲まれていました。古くは柴村の一部でしたが、後に金杉に属しました。明治5年(1872)、三草藩丹羽長門守、柳本藩織田安芸守、薩摩屋敷の一部、大垣藩戸田采女正の屋敷を合わせて新堀町としました。

さいおうじまち

西應寺町

古くは柴村の一部でしたが、天正19年(1591)に西應寺の拝領地となりました。慶長12年(1607)、ここに市店を開くことが許され、寛文2年(1662)に町奉行支配となりました。この町は門前町として発達してきたにもかかわらず、古くから西應寺門前とは称されず、ただ西應寺町と呼ばれてきました。明治2年(1869)に安楽寺門前を、明治5年(1872)に付近の寺地を合併しました。新堀町との間を三田四国町に沿って三田通りに抜ける道を俗に「七曲り」といい、昔は大名の御用商人などが軒を並べる繁華な小路であったと伝えられています。



曲谷健一さん

マガタニ漆製造販売業

曲谷家のご先祖は能州(今の能登半島)に関わりがあり、天保年間(1830-1844)の頃に江戸に出てきたといわれ、慶応4年(1868)生まれの祖父、七之助さんの代には、現在地で漆製造販売業を家業としていました。「漆屋」といっても塗師や時絵師のように漆を塗るのではなく、漆という「塗料」を売る商売で、漆の木に螺旋状に傷をつけ、にじみ出た樹液を集め混ざり物を濾して精製したものを、黒漆、朱合漆、生漆として製造、販売していたそうです。化学製品の無い時代には、強くて剥がれない漆が唯一の塗料として重宝され、20匁(75g)、100匁(375g)などのサイズを曲げワッパの弁当箱に似た容器に詰めて、全国各地の漆器産地に販売していました。

当時の東京でも、漆の製造から販売までを行っているところは6〜7軒しかないほど珍しい商売で、曲谷さんの父親の清一さんも日本各地から集めた生漆を製造販売し、「用途に合った漆を作って欲しい」という生漆を塗料として使用する職人さん、芸人の先生方や工芸家の要望に応えながら販売していたそうです。

漆は縄文時代から利用され、日本独自の技術として発達したと言われており、今ではあまり聞かなくなりましたが陶器のことを「チャイナ(China)」と言うように、漆器のことを「ジャパン(Japan)」と言った時代もありました。

漆の樹液はウルシオールという成分からなる天然の塗料で、漆を塗った後の乾燥は一定の温度と一定の湿度のある風炉内で、ゆっくりと乾い



龍(漆、金箔)

VOICE
芝人

我が家の150年物語

ていく特殊な工程です(※生乾燥の時は、漆の性質からアレルギー[漆かぶれ]を起こすことがあります。完全乾燥していれば安全な塗料です)。漆は水に強く、高級机、食器、椅子、工芸品などに拭き漆として塗ったり、色材と混ぜて塗った後に研ぎ出したり、艶出しに使われました。さらには金箔などの下地に塗られたり、茶碗が割れた時の接着剤としても使われました。

明治5年(1872)に明治天皇がお乗りになられた新橋-横浜間の鉄道の御料車両の塗料には、マガタニの製造した漆が納められ、使われたそうです。

「私は関東大震災の翌年の大正13年(1924)生まれ。子どもの頃、芝西久保八幡町の家の前の通りには、築地、五反田、四谷方面行きなどの路面電車が走り、区立柄絵小学校には生徒が1,200人ぐらいいりまして、子供会から少年団などができた時代でした。その後中学から慶應義塾に通いました。終戦の時は学徒動員で、陸軍の砲2953部隊の一員として転戦して参りました。明治から大正へ時代が変わるころに塗料としての漆は、ニス、エナメル、プラスチック、ビニールなどによって代われ、漆の需要は次第に減ってきました。

現在は特殊な工芸品や美術品、漆工芸の愛好家などに需要があるだけで、事業としての発展は望めなくなり、私は戦後に自動車部品の販売会社を起業しましたが、家業であった漆製造販売業を誇りに思っています」と、当時を振り返る曲谷さん。

虎ノ門で、長男の栄一さんが骨董業を、次男の慶二さんが内装業をしています。

栄一さんは商売としての骨董品の収集とは別に、特に江戸、明治、大正、昭和時代の火消しの人たちが着た消防装束、刺し子半纏、刺し子頭巾、刺し子手甲などを多く収集しています。刺し子半纏とは厚手の木綿で織った羽織のことで、江戸の粋を表して、表は華美にせず藍染の無地、または格子柄などを描き、裏には水の化身、龍などの絵柄を織り込み、心意気を表しています。



①刺し子頭巾 ②刺し子手甲 ③刺し子頭巾の裏地模様 ④刺し子半纏

芝にある風景

慶應義塾図書館旧館

慶應義塾創立50年を記念して計画がなされ、明治45年(1912)に建てられた三田キャンパス内の図書館旧館。赤レンガ造りの外観や館内で迎えてくれる美しいステンドグラスがとても素晴らしく、以前から描いてみたかった風景でした。慶應義塾大学の卒業生であり、影絵作家の藤城清治さんが手がけた図書館旧館の作品に感銘を受けたのも理由のひとつです。昭和40年代前半まで都電三田線が走行していた頃は、敷地外からも図書館旧館を見る事ができ、この場所を通りその優美な姿を見るたびに、なぜか誇らしげな気持ちになったものです。図書館旧館周辺は銀杏の木々が黄金に染まる秋風景

●大野正晴

昭和26年(1951)生まれ。新橋で生まれ育ちましたので、特に港区、芝地区には愛着を持っています。この地域は歴史的名跡が多く、ニュースポットもいろいろとあります。心に感じた風景を今後も描き続けたいと思っています。37年間、新橋にあるタトク木(株)に勤務。

今回、芝消防署の庁舎新築に伴い、刺し子半纏、頭巾などが展示されました。

西久保八幡神社総代

「我が家の後ろは西久保八幡神社で、緑に囲まれた芝西久保八幡町(現虎ノ門五丁目)を代表するスポットです。境内には縄文時代に貝塚であったという東京都指定史跡の標識があります。この神社の縁起は古く源頼信(968〜1048)の関東平定に端を発し、平成23年(2011)には神社1000年祭を迎えました。西久保八幡宮の本宮は京都の石清水八幡宮で、初めは霞が関の今の外務省の場所に勧請され、太田道灌の時代に当地に移されました。

私は西久保八幡神社の責任役員、総代をしており、小さい頃八幡宮が持っていた大きい御神輿を牛車で引いたことなどを思い出します。その御神輿が昭和20年(1945)の空襲で焼けてしまいましたので、氏子による長年の積み立てと、多くの方々のご支援により今年御神輿を新調いたしました。徳川秀忠二代将軍の奥方、お江の方がかつてこの神社を建立してくれた縁起もあり、御神輿は日光東照宮のような彩色豊かに、また虎ノ門の地名に因み、白と黄色の2匹の虎をあしらいい、波に千鳥ではなく鳩を描いたすばらしい本社御神輿です。



御神輿と栄一さん(左)、慶二さん(右)

今年7月に神社境内で氏子による担ぎ初めをしました。

今年90歳を迎えられた曲谷健一さん。愛宕四之部地区防災連合会会長を始め、愛宕防犯協会会長、八幡町会長、港区神社総代会会長など、また株式会社マガタニ会長として、要職として活躍をされています。

【文 ■ 曲谷健一、森田友子】

●取材協力

株式会社マガタニ会長 曲谷健一さん

Information

株式会社マガタニ
虎ノ門5-10-13 TEL 03-3433-6321

絵・文 大野正晴



